



場所：奈良市、旧柳生陣屋跡／日時：2018年4月4日

「庭の実測は、根のいる仕事」

●今日はちょうどいい天気恵まれたし、サクラも満開で本当に綺麗ですね。さて、この旧柳生陣屋跡というのは、ちょうど40年前に森先生と山中さんが整備されたんですね。整備をする前はどのようなところでしたか。



山中 功(やまなか・いさお)

1944年、奈良県に生まれる。造園家、庭師。1969年に森繻と出会い、1970年4月より庭園文化研究所所員となる。1980年10月に山中造園を設立。作庭のほかに、古庭園の実測や復元整備にたずさわる。2017年12月文化庁長官表彰を受賞。

山中…整備する前はもと小学校の跡地でした。東側に

校舎を配置し、その前に運動場が広がっていたようです。

小学校が移転してから、もともとの陣屋跡の景色を戻そう

と、奈良市が森先生に整備をお願いしました。しかし、図

面がないものですから、まずは現地を実測することから始

まりました。現況図をもとに、今度は発掘調査をしました。

発掘をしないと位置関係がわからないものですから。そう

して実際に掘ってみたら、井戸が出てきたんですね。コン

クリートの蓋をされていたが、その下に江戸初期の石

積が綺麗に残っていました。その頃の武家屋敷には、井戸

が台所の中にあつたということで、森先生はこの井戸を中

心に、古図に見られる屋敷の間取りを参考に整備しました。

森先生と一緒に、いろんなところで測量をしてきました

が、平面だけではなく、いつもレベルで海拔を測っていま

した。たとえば、ここは海拔が263・5から264メー

トルの平坦地です。それに合わせて整備しました。たとえ

ば、大玄関の前に見える岩はじつは、地山の岩なんです。

森先生はそれを活かして、周辺に玉石を敷いて、山岳的な

石組にしました。

●この陣屋跡は具体的にどのように整備されましたか。

山中…建物を復元するほど情報はありませんでしたが、石

積で屋敷の間取りを表わしました。石積の高さは当時の武

家屋敷の床の高さ、50、60センチに合わせました。畳の部

屋には芝を張って、廊下は砂利敷きにしました。でも、40

年経って廊下の砂利部分は全部芝に覆われましたね(笑)。

井戸は丈夫に作られていたので、目印になるように、その

上に1メートルぐらいの高さの石積をしました。

凹んでいるところは坪庭だった場所ですが、発掘調査から

遺構も出てこなかったし、古図にもその姿が描かれていない

ので、森先生は地元の石を集めて、自由に石組されました。

花崗岩が多いので、角張った石や丸い石、天端の平らな石な

ど、いろんな形のを組み合わせ、その場で指導してい

ただきました。納屋があつた場所は石積ではなく、切石で囲ん

で花壇を作りました。背後は生垣を配置し、サクラ、マツ、モ

ミジを中心に四季を彩る植栽にしました。陣屋跡なので、森

先生はやはりマツとサクラで華やかにしたかったと思います。

当時は休憩所がなかったんですが、雨をしのぐ場所がなかつ

たので、その後に観光協会が休憩所を作ったんだと思います。



左上：柳生陣屋で発掘された井戸 右上：井戸の前でノートをとる森蘊 左中：枯山水の作庭工事 左下：完成した枯山水庭園（森蘊設計） 右中：柳生陣屋跡の園路 右下：石積で復元された柳生陣屋跡の間取り（「山中功旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）

●公園の南側は発掘の成果と、古図に描かれた間取りに基づいて整備された歴史的なエリアということですね。それに対して、北側はどのように整備されましたか。

山中…北側には遺構が見つからなかったけど、ちよつと凹みのあるところがあったので、その地形に合わせて森先生が枯山水を作りました。枯池を作るために掘り上げた土は北側に上げて、築山にしました。あとは、護岸の要所所に景石を据えました。護岸と池床全体は玉石敷で仕上げました。それと出島に立石を据えました。この立石は浄瑠璃寺の中島の立石によく似ているでしょう？ じつは、森先生が浄瑠璃寺庭園を整備したのは昭和51（1976）年、このちよつど2年前のことです。

しかし、この枯池周辺は今、芝生や雑草に覆われていて玉石も景石も見えなくなっていますね。

全体を回遊できるように、園路を作りました。だいたいの道筋は私が図面上で決めて、先生に見ていただきました。「あまり真つすくすぎると違うか」と言われましたので、結局ちよつと迂回するようになかちで描きなおしました。こうして、最初は実測図を作つて、その次に発掘の製図、

最後には整備の計画図を描きました。

●山中さんが森先生と一緒に働くようになったきっかけは何ですか。

山中…昭和37（1962）年の暮れか、38年頃だったと思います。庭の仕事がしたいと思つていたところ、庭園史研究の権威者を紹介してあげると、ある方に言われました。普通の造園屋で働くよりかは、学者さんについて勉強したほうがいいだろうと、私は思いました。数日後に森先生にお会いしたら、「どうしてもしたいなら、弟子が2人いるから、そこで一緒に仕事しなさい」ということで始まりました。全然知らない世界に飛び込んでしまったものですから、一から勉強しました。

1年間ほど2人の庭師についていたんですけども、ある時、突然「君、測量できるか」と森先生に聞かれました。高校時代にちよつと測量の勉強もしていたので「平板ならできます」と答えたら、早速次の日から庭園文化研究所の研究員になつていて、測量をすることになりました。

初めて行つた現場は京都の法金剛院庭園。ちよつど滝組

が完成したところでした。そこで初めて森先生と村岡正先生と一緒に平板測量をしました。それから、和歌山城の紅葉溪庭園、平泉の観自在王院、毛越寺、白水阿弥陀堂……。とにかく、整備をする前に、まずは測量して現況図を作成しておかないといけないので、ひたすら古庭園の測量をしていました。この技術は何となく身につけて、今後に生かしたいなと思って、ずっと森先生と村岡先生について覚えさせていたんです。

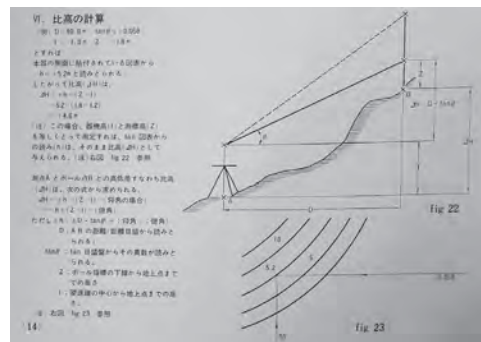
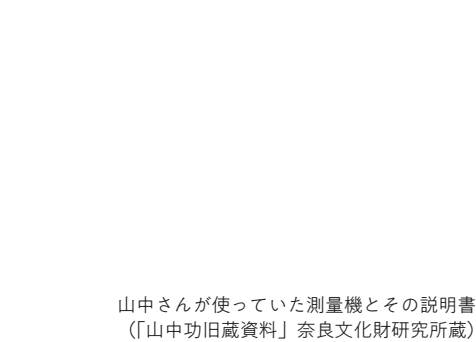
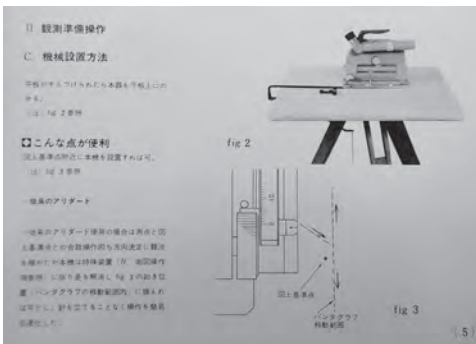
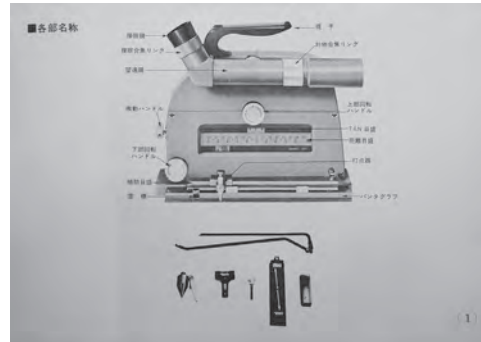
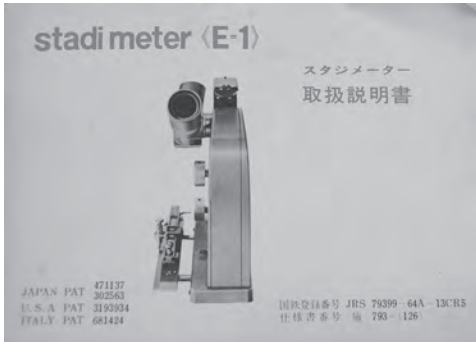
特に、和歌山城の紅葉溪庭園で石の扱いや石組の修復をだいぶ勉強しました。石が多かったですからね。あそこをやりこなせたことで、修復の考え方、やり方が少しわかりました。

●山中さんは測量をたくさんされてきましたね。現在はトータルステーションという便利な測量機があります
が、当時は何で測量されていましたか。
山中…庭の実測はたくさんやりました。根のいる仕事ですね。特に石の多い庭はたいへんです。
今みたいに高度な測量機ではなかったんですが、法金剛

院庭園の測量をした頃にアリダード（スタジメーター）という画期的な測量機が出てきました。それを平板上に載せてから目標点を定めると、距離と高低差を測ることができるようになった機械でした。これでテープもボールもいらなくなりました。アリダードとスタッフさえあれば測量できました。おかげでだいぶ早くできるようになりました。最新の光波とは比べものになりませんが（笑）。でも、あの機械でたくさんさんの庭を測量して、図面を作りましたね。庭はどんどん変わっていきますから、記録を残すのも大事だと思いますね。

●森先生は学術的な図面をたくさん残しましたが、庭のスケッチもよくされていたようですね。

山中…スケッチは覚えたかったですね……。先生に一遍お尋ねしたんですけども「スケッチってなかなか難しいよ」と言われたきりです（笑）。
森先生は現場で写真を撮らずに、いつもスケッチをされていました。それも早かったですね。縦12センチ、横18センチぐらいの紙と、墨つぼに柄がついた中に筆を入れた矢



山中さんが使っていた測量機とその説明書
（『山中功旧蔵資料』奈良文化財研究所蔵）



場所：奈良県大和郡山市、松尾寺本坊／日時：2018年4月4日

「一見して、なんでもない庭のようですけど、
落ち着いた感じがありますね」

●松尾寺は郡山市の西に聳え、たつ松尾山の中腹に建って、日本最古の厄除け寺として知られています。境内はとも広いですが、本坊の北庭は森先生が作ったのですね。山中…そうですね。本坊が昭和50（1975）年に修理されたときに森先生がこの庭を作られました。ちょうど僕がお手伝いをし始めた頃ですね。その後はずっと手入れをさせてもらっています。

ここは本坊の北庭であり、広くない空間ですが、生垣の向こうに本堂の屋根が見えて、わりと奥行きのある感じがします。境内の中で、北向きになっているのは本坊だけです。本堂、大黒堂、七福神堂、行者堂、三重塔もみな東を向いています。本坊は住職の住まいで、座敷から本堂を拝

立てを、いつもカバンに入れておられました。庭全体を表現することができるとすごいと思いました。奥行きや感覚など、バランスが難しいんですよ。森先生は特に習ったわけでもなさそうですが、やはりセンスというか、優れた感性でしたね。

●森先生は学者として、歴史的な庭園の発掘と復元整備もされましたし、また作庭家として新しい庭もたくさん作りましたが、そのやり方というか、姿勢は違いましたか。

山中…そうですね。史跡の整備と、個人宅の庭園の作り方はやっぱり違いますね。石一つにしたって、植栽一つにしたって、扱い方が違います。

古庭園の場合は石組がどうしても崩れたり、壊れたりしているの、それをどの位置に戻すのか、どのように修復するかということ、森先生はよく苦悩されたと思います。落ちたかを判断するのは難しいですからね。そこは長い経験がないと判断しづらいです。だから、森先生の力つてすごいだなと思いました。それでも、石の崩れ方によって

は、さわりがたいところもあったみたいですね。「もうこのまま置いてどうか」と言われたこともあります。やはり、史跡や名勝庭園では、石が明らかに崩れていても、なかなかさわれませんね。一度さわってしまうと、もとの関係がわからなくなってしまうでしょう？ だから、森先生はいつも実測図を作って、記録を残していました。そのへんがやっぱりだいぶ違います。

しかし、先生は古庭園で見た石の据え方や間隔とかを作庭にも活かしていましたね。石の向き、高さ、相互関係とか。それは森先生に惹かれた理由の一つです。やはり、普通の植木屋さんと違いますね。森先生は植栽に関しても細かかったです。特に枝ぶりや木の向き、少し高くとか低くとかですね。いつも離れたところから庭全体をよく観察していました。一本の枝を切ることによって、空間がどう変わるのか、またその後に木がどう伸びていくのかをいつも考えておられました。

とにかく、陣屋跡は完成してからほとんど来ることがなかったのです。こうして桜吹雪の中で久しぶりに見れてよかったです。

（了）

めます。

この庭はだいたい50平米ほどあるんですけども、日陰でも育つ木のほうがいいだろうということで、アセビの生垣で区切りました。でも、ここは厄除けで有名なお寺なので、垣根以外は、赤い花や実のなる植物を主に植えました。赤が魔よけの色なんですね。ツバキ、サルズベリ、サツキなどは赤い花が咲く。ナンテン、センリョウ、マンリョウ、ヤブコウジ、ウメモドキなどは赤い実がなる。それに、秋に紅葉するモミジ。そういう植物が主体になっています。数年前まで縁側の近くに山桜もありました。実生で生えてきましたが、大きくなりすぎて、建物によくないので伐採しました。モッコクだけは改修される前からあったんです。これは結構古い木で大事に手入れをしています。

●この庭のテーマは「厄除け」ということですね。飛び石や景石の配置にも特別な意味がありますか。

山中…飛び石や景石の配置などは、厄除け寺といっても特別に意味はありません。飛び石はもとからあったものですが、改修のときに配置換えをしました。飛び石自体

が大ぶりなので、歩きやすいように、と。景石はみな、森先生と一緒に新しく据えました。最初に一番大きい石を据えて、それからほかの石を組んでいきました。

あとで聞いたことですが、森先生は『鳥獣戯画』をイメージされていたようです。動きのある石組ということでしょうか。ほら、あの石は何か追っかけているような感じでしょう？ 私もこの庭で石の据え方とか、いろいろと勉強させていただきました。石はどれだけ埋めるとか、どれぐらいの間隔を空けるとか、どの角度を見せるとかね。当時は先生の指示に従うだけでしたが、あとで気がつきました。ああ、こういう据え方をするんだな、と。

たとえば、この空間にでかい石を持ってくるとバランスが悪いですね。これぐらいがちょうどいいんです。こじんまりとした庭はそれなりに工夫が必要です。先生が据えられた石だから、こうした落ち着いた感じになるのでしょうか。

●新しい石はどこから持ってきてこられたのですか。

山中…新しく据えた石はみな、この山から探してきました。



松尾寺本坊北庭（澤崎賢一、2018年撮影）

森先生は石質とかにこだわっておられなかったのです。「ある石をうまく使え」と。どんな形の石でも、うまく扱って据えておられましたね。バランスよく。

先生は史跡や名勝庭園の測量や修復をしたりするなど、いろんなことを経験されてこられましたので、石の大きさや配置、据え方とも十分に考えて庭を作っていました。たとえば、ここにあまり大きな石を持っても合わないでしょう。仮に持ってきたとしても、森先生はそれを深く埋めて、小さく見せます。大事なのは、石と石との関係です。立石は時々使っておられましたが、めったにないですね。ここでも、立石は一個あるけど、あまり高くないでしょう？ この場合は、厄除けのお寺なので、あまり派手な庭にはしたくなかったようです。

あいにく、森先生と一緒に石を据えたりするような、作庭の経験は少ないです。僕は測量や発掘調査のほうが多かったです。ただ、森先生は石が大好きだったことは確かです。たとえば、発掘の現場でいたい作業をするのは地元の方でしょうか？ 埋もれていた石が出てくるたびに「先生、先生！」と大きな声で呼ぶんです。そうしたら「どれ、

どれ」と言っただけで先生は走ってこられます。みなさんはそれをおもしろがって走らせてましたね（笑）。

●柳生陣屋跡の場合は現況の実測図と作庭の設計図を作りましたが、松尾寺本坊の場合も図面を描きましたか。

山中…この場合は図面はなかったのです。森先生の頭の中に設計図があったと思うんですが、直接現場で指示されました。柳生陣屋跡「↓134頁を参照」と違って、松尾寺本坊の庭は面積的にもあまり大きくないので、現場にある材料を見ながら作られました。この石はここだ、あの石はあそこだ、と言われてとりあえず配置しておきます。それぞれの位置に置いてから、森先生が縁側に腰をかけて、石の高さや角度を見ながら据え方を決められ、僕はただただ、言われるままに動きました。この庭で何か特別な催しをすることはないので、本坊から鑑賞できるように作ったと思います。

時々、森先生が腰を下ろしていたこの縁側に座って、庭を眺めたりします。一見して、なんでもない庭のようですが、けど、落ち着いた感じがありますね。

●山中さんは40年間ほど、この庭を手入れされてきましたが、大きく変わったことはありませんか。

山中…全体的に木が大きくなりましたね。特に生垣のアセビが大きくなって、雰囲気が変わりました。当初はだいぶ低かったんですが、木も生きていますのでね。作った当時のイメージを維持できれば一番いいんでしょうけれども、やはり、年代とともに変化していきます。変わらない庭はないと思いますし、ここは広い境内の一つの庭なので、庭木がちよっと高くなってもいいかなと思っています。

●この庭を作る前に、森先生は外苑という庭も境内に作りましたよね。

山中…はい、昭和35（1960）年に外苑という回遊式の庭を作りましたが、それは僕が森先生を知る前のことですね。急斜面に作られた庭ですが、一角に新しい塔頭^{たっちゅう}が建つというところで、その部分は潰されました。南の池庭や途中の滝石組などがまだかろうじて残っているだけです。見事な石組ですけど、現在はあまり見られるような状態ではありません。北のほうに「アルプスの枯山水」という石

組もありましたが、あいにく潰れてしまいました。今となってはイノシシに荒らされる竹藪です。最初に植えたサクラ、ツバキ、カシ、ヒノキなども自然のかたちに戻って、山林化しています。

●おもしろいですね。本坊の北庭の場合、森先生は『鳥獣戯画』や『作庭記』という古代の文献を参考にしながら庭を作りました。一方で、外苑の場合はアルプスというまったく新しい景色をイメージしていたということですね。

山中…本坊の古庭園では『鳥獣戯画』と、外苑の山林ではアルプスの豪快な石組。森先生の中には両方の思いがあったと思います。古代の庭園のイメージはやはり、多くの遺跡や歴史的な庭園の調査をされた経験上の技だったと思います。アルプスのイメージは国立公園の調査技官の頃（1938～1941年、33～35歳頃）にできたと聞いています。先生は、壮大な岩肌の景色をこの庭に取り入れたかったのではないかと思います。

（了）